

史跡勝沼氏館跡

平成4～7年度外郭域G地区発掘調査概報



勝沼町教育委員会

序

勝沼氏館跡の発掘調査が始まってから20年目の平成4年内郭部一帯の環境整備も済み、史跡買上事業により外郭域も順次公有化が進められるようになり、その整備計画の方向づけを行い、整備公開がもとめられる時期となってまいりました。

その第一歩として、外郭域の性格を明らかにするため、平成4年度より県立ワインセンターの取り付け道路の北側一帯、G地区の発掘調査を東側から順次開始いたしました。このG地区は、館の東郭と東郭の東辺区分施設、及び郭外領域にまたがっており、郭外家臣屋敷の有無や東郭東辺区分施設の構造の解明が期待されていました。調査の結果、内郭部とは異なる掘立柱の建物群や、水路、井戸、土塁などが生活用具とともに発見され、さらに内郭部の3時期の変遷に対応し、さらにそれぞれが小2期に区分される変遷過程が想定されるなど、予想外の成果をうることができました。今後はこの成果に基づき、整備計画を検討し環境整備事業を行い、公開していくたいと存じます。

1996年3月28日

勝沼町教育委員会

教育長 高野 英夫

例言

1. 本書は、国指定史跡勝沼氏館跡の環境整備事業に伴う資料調査として、平成4年度から平成7年度まで国・県の助成を受け、勝沼町教育委員会が実施した、外郭域G地区の調査概要報告書である。
2. 本書にかかる調査年度、調査次、実施期間は以下の通りである。

平成4年度	第12次	1993. 1. 18~1993. 2. 19
平成5年度	第13次	1994. 1. 20~1993. 4. 30
平成6年度	第14次	1994. 11. 1~1995. 2. 28
平成7年度	第15次	1995. 11. 17~1996. 2. 20
3. 本書の執筆編集は、室伏徹が行った。
4. 本書にかかる出土品、記録図面、写真等は一括して勝沼町教育委員会に保管してある。
5. 勝沼氏館跡にかかる報告書は以下のものがすでに刊行されている。
 - 1) 勝沼氏館跡発掘調査概報
 - 2) 勝沼氏館跡発掘調査概報II
 - 3) 勝沼氏館跡発掘調査概報III

凡例

1. 本書で使用している遺構記号は以下の通りである

遺構	地区	種別	番号	S	G	B	0	1
A	土塁	記号	K					内 容
B	礎石建物、掘建柱建物、堀柵遺構		P					土壌
D	水路、溝状遺構		T					水溜
E	井戸		Z					堅穴住居、堅穴遺構
F	炉、焼土		X					敷石
H	堀							石組、石積、列石、集石

2. 調査は5mのグリッドを設定しておこなった、南北方向の杭列は原点をEW0とし、東側はE5、西側はW5とし、東西方向の杭列は原点をNS0とし、北側はN5、南側はS5とし、杭番号はW5N5杭として表示し、5m四方のグリッドは南西隅の杭番号を代表させW5N5グリッドとした。
3. 本書中の東西南北の表記は、グリッドの東西南北方向により示してある。

目 次

序
例言
凡例
目次
図表、写真目次

1	はじめに.....	1
2	調査の経過.....	3
3	遺構	
3-1	層序.....	5
3-2	中世以前の遺構.....	5
3-3	中世遺構.....	5
3-4	中世以後の遺構.....	14
4	遺物	
4-1	中世以前の遺物.....	15
4-2	中世遺物.....	15
4-3	中世以後の遺物.....	16
5	まとめ.....	17

図表写真目次

図表

图表 1	勝沼氏館跡位置図 (1:10000).....	2
图表 2	勝沼氏館跡調査地区々分図.....	3
图表 3	勝沼氏館跡外郭域調査一覧表.....	4
图表 4	勝沼氏館跡外郭域 G 地区遺構図.....	別添
图表 5	外郭域 G 地区掘立柱建物集中状況図.....	10
图表 6	外郭域 G 地区掘立柱建物一覧.....	10
图表 7	勝沼氏館跡外郭域 G 地区掘立柱建物群変遷図.....	11
图表 8	A 群掘立柱建物重複共存関係図.....	12
图表 9	外郭域 G 地区櫛欄掘立柱遺構一覧.....	12
图表 10	勝沼氏館跡外郭域 G 地区遺構変遷模式図.....	18
图表 11	勝沼氏館跡遺構図.....	別添

写真

表紙	勝沼氏館跡周辺全景	
写真 1	平成 5 年度調査区全景.....	25
写真 2	平成 6 年度調査区全景.....	25
写真 3	出土磁器.....	27
写真 4	出土陶器.....	27
写真 5	出土陶器.....	27
写真 6	平成 4 年度調査区全景.....	29
写真 7	掘立柱建物 SGB01 柱穴.....	29
写真 8	ヒデバチ検出状況.....	29
写真 9	G1 テラス北屢数据立柱建物群.....	30
写真 10	幹線水路系 SGD04、SGD08、SGD09.....	30
写真 11	幹線水路 SGD04 埋土遺物出土状況.....	30
写真 12	幹線水路 SGD04 浇灌手前雑器類出土状況.....	31
写真 13	幹線水路 SGD05.....	31
写真 14	平成 6 年度調査区全景.....	32
写真 15	G1 テラス南屢数据立柱建物群.....	32
写真 16	土壙 SGA01 と 土壙脇溝 SGD17 (北西より)	32
写真 17	堀 SGD16 の終端状況 (北方より)	33
写真 18	水溜 SGP01 (西方より)	33
写真 19	石積井戸 SGE01	33
写真 20	石積井戸 SGE02	34
写真 21	平成 7 年度調査区全景 (直上より)	34
写真 22	平成 7 年度調査区位置 (東方より)	34
写真 23	水溜 SGP02 全景 (南西より)	35
写真 24	水溜出水路 SGD33 と 閉塞、土橋設置状況	35
写真 25	通路空間 SGC02 (北西より)	35
写真 26	出土遺物	36

1 はじめに

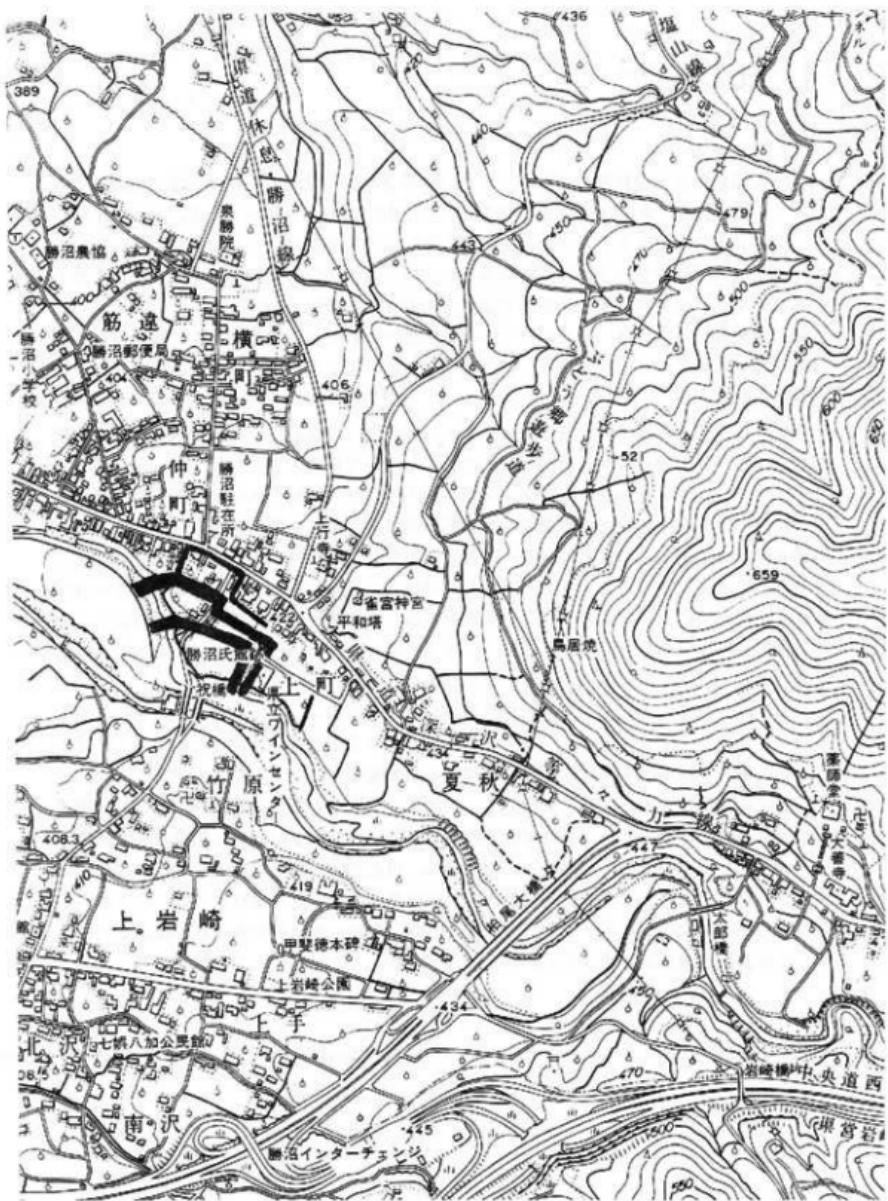
勝沼氏館跡は日川扇状地の扇頂部、日川右岸第2河岸段丘面の段丘崖屈曲部に選地された館である（図表1）。また、館の北西には柏尾山の山裾から鳥居平、上之山の第1河岸段丘面が10m近い段差をもって迫って来ており、この突端部に当たる旧淨泉寺跡（現在の上町小公園）と内郭部の北西隅を対峙させており、この位置関係は甲府市の武田氏館跡の内郭部（東郭）北東隅と櫛觸ヶ崎の突出部との関係に類似している。

館の郭配置については、現状地形や昭和52年度に行われた範囲確認、その後の現状変更調査、環境整備に伴う一連の調査、県道敷の水道管付設工事の立ち会い確認等でその変遷も含め把握されつつある。

まず、館の第1期段階では内堀に区画された内郭部と、縦堀により区画された外郭帯の重籠構造で、内郭部の東辺側に正門が配置されており館全体が東に向いていることが明らかにされている。第2期以降は内郭部の正門は北西隅に移り、館全体が北を向くようになる。これに伴い外郭帯内に外堀を構築し、内郭部東側では近接二重堀構造を取り、北側では内郭部北門の延長線上に当たる、現在の県道塩山市川大門線部分で鉤の手に屈曲させ、北辺を縦堀の位置までずらすことにより北西郭を形成している。これに合わせ縦堀も北西郭を囲むように北側に45m程張り出させ、北郭を構築し館の北門側の防備構造を厳重にしている。また、町屋の中心街路と考えらる「小佐手小路（御先手小路）」は、北郭の先から始まっている、北郭に館の正門の存在が想定される。

なお、江戸初期の元和5年(1619)に整備された甲州街道は、この北郭北辺縦堀のすぐ脇を東西に通過するよう設定されており、この折り返しの北辺通過部分が「前小路」と呼ばれたことも館の存続期の東西通路の名称を踏襲した可能性が高いと思われる。

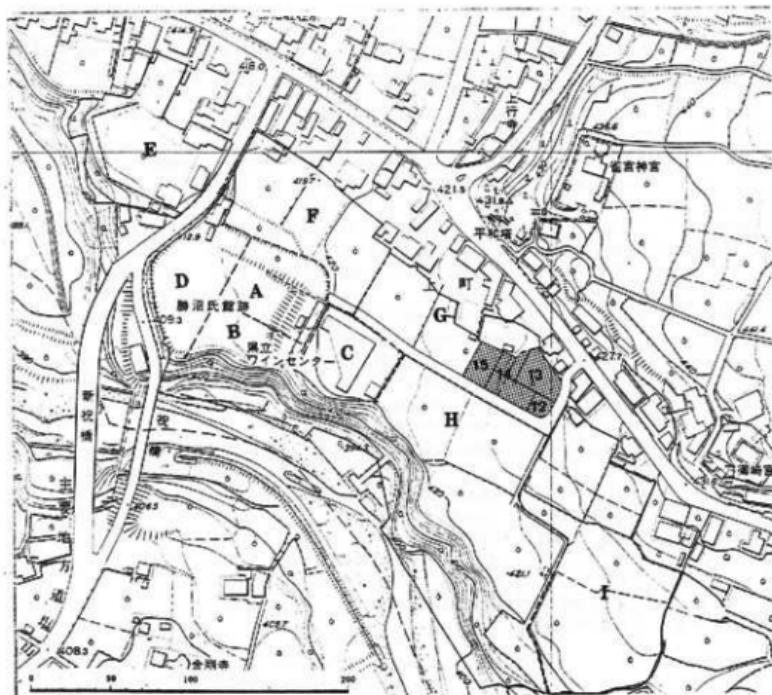
一方、内郭部の裏門となつた東門側でも同様に、縦堀から70m程離れた位置に、土塁と堀を入れ違い状に配置し、これに東郭東門を取り付け、館の東門側の防備構造を固めており、全体として少なくとも四郭構造の東西340m、南北200mの範囲を占める大規模な城館に修築されたと考えられる。なお、東郭北辺の防備施設については現在までのところ明らかになっていないが、鳥居平、上之山の台地との間に幅20~30mの沢の存在が確認されており、この沢を防備施設の要としていたと考えられる。



図表1 勝沼氏館跡位置図(1:1000)

2 調査の経緯

平成4年度から始められた環境整備事業に伴う調査地区は、旧国道20号線から県立ワインセンターに入る取り付け道路の北側一帯に当たる。外郭城では昭和49年に県立ワインセンター用地が第3次調査として実施され2重堀構造の館であることが明らかにされ、史跡指定に向けて予備調査として昭和52年度に遺跡範囲確認調査が実施された。この時の地区区分でG地区が本調査地区にあたる。この時は部分調査であったため本調査で確認された遺構は発見できなかったが、H地区では水溜と土塁の存在が確認され東郭の範囲を知ることができ、この遺構の存在が本調査に深くかかわっている。その後、昭和60年度に水上屋敷2474-9、10番地で住宅建設に伴う現状変更事前調査が行われており、この調査でH地区の東郭東辺土塁と食い違う位置から土塁に伴う堀が発見され、当該地の公有化が始まる事となった。現在までに実施された調査は図表3のとおりである。



図表2 勝沼氏館跡調査地区々分図

図表3

伊勢名古屋市・高宮町ガト事区地質調査——調査結果

調査期間	調査区	調査成果	備考
第3次 1974. 2. 26~ 1974. 3. 10	C区 東部地区センター予定地	・水道2、水路2、敷石等を検出 ・内堀に近接した外堀を検出	・全体として遺構の遺存状態が良好でない
第7次 1977. 11. 6~ 1977. 12. 26	E区 北西の郭	・北側の谷から東へ延びると推定される堀は調査面積が狭小のため確認できなかったが、石積みを検出	・表土より近世陶磁器、かわらけを検出
	F区 内部部の北側	・C区の外堀と連続する外堀を確認 ・さらに外側から規模の小さい第3の堀を確認 ・外堀と内堀の間で現在高約1mの土堤を確認、初期段階では無かった事も確認される	・第2の堀の北側に平行して走る築高地は近世の陶磁器を多様に含む包含層上有ることから土器でない事を確認 ・外堀と内堀の間の土堤構造前の層から内部部の初期のかわらけを検出
	G区 外部北東域	・ワインセンター北側より第3の堀と考えられる落ち込みを確認 ・礎石と考えられる河原石を検出	・礎石状の石の周囲からかわらけが検出される
	H区 東郭域	・ワインセンター東側より大規模な水溜りの存在を想定できる石積みを検出 ・東郭を画する土堀と塀を確認 ・中世と考えられる柱穴を検出 ・口川に面した側からもかわらけを伴う石列が検出される	・平安時代の住居址を確認 ・仏教遺物（六器の器台）が検出される ・外部外では内部部と異なる獨立柱建築の存在が想定される
	I区 II区の東、日川に面した地区	・表土以下が地山層で遺構は未検出	・かわらけ片を検出
第10次 1985. 4. 1~ 1985. 4. 21	G区 現状変更に伴う調査(2174-9)	・東郭を画する堀が南側H区で確認された位置より約15m東で検出され、この間に入れ違いの東郭東門の存在が想定される	・堀内部より前の第2期に伴う陶器が検出される
第12次 1993. 1. 18~ 1993. 2. 19	G区 平成4年度環境整備に伴う調査	・獨立柱建物、堀の柱穴が検出される ・旧地形は現状地形とは逆に傾斜し、鳥居平の台地と館の間に沢があった事が確認される	・内郭の第2期以降の陶器、かわらけ検出 ・平安時代の住居址3、近世以後のぶどう塀の検出
第13次 1994. 1. 20~ 1994. 4. 30	G区 平成5年度環境整備に伴う調査	・新旧2時期の水路と6期に及ぶ家臣屋敷の獨立柱建物群が検出される ・建物の柱は丸柱で、壁土が検出される	・第3B期の最終期結構は志野焼小窓を伴う ・新旧2時期の水路が検出され現在の深沢用水は第3期の水路を継承
第14次 1994. 11. 1~ 1995. 2. 28	G区 平成6年度環境整備に伴う調査	・第13次の南側の家臣屋敷が確認されこれに伴う井戸が検出される ・外部の沢辺を両側、土堀、土塁脇溝、水路、郭内引水点が確認される	・
第15次 1995. 11. 17~ 1996. 2. 20	G区 平成7年度環境整備に伴う調査	・東郭東門内より第2期の大規模な受水槽と出水路等が検出される	・

3 遺構

3-1 層序

外郭域の調査では、勝沼氏館跡成立以前の自然層序として、内郭部で確認された状況と同じく上部より黒褐色土層、暗茶褐色土層、黄褐色砂質土層、明褐色砂質土層、明褐色砂礫土層となっている。黒褐色土層から暗茶褐色土層が、縄文時代から平安時代の包含層となつておらず、掘削や盛土等大規模な地形変動が行われなかつた地点では、黒褐色土層の上部が中世遺物の包含層となつてゐる。また館廃絶以後、現在のふどう畑に至るまでの過程で、調査区の広い範囲にわたつて、水田化、畑地化された層序が確認されておりこれを模式的に示すと、上部から茶褐色土層（石灰粒を含む耕作土）、明灰褐色粘質土層（水田耕作土）、赤褐色粘質土層（水田鉄盤層）、水田面形成盛土層などの人工層が認められた。

また、中世以前の調査地区一帯の自然傾斜は、現状では北東から南西に低くなるが、南東から北西に傾斜していることが明らかになり、この結果第1段丘の段丘崖と第2段丘面の間に沢状地形が入り込んでいたことが確認された。この埋没沢は、『勝沼町誌』で内田保雄氏が地形や花崗岩の路頭の観察から日川の旧流路の存在を指摘していた場所と一致しており、館の遷地の際、北辺防備の要として重要な役割を担つてゐたと考えられる。

3-2 中世以前の遺構

館成立以前の遺構としては、縄文時代早期末の胎土中に纖維を含む土器がE2N0グリッドに、前期末の諸式土器がE0N3グリッドの黒褐褐色土層中からまとめて検出されており、この下部に住居址の存在が予想される。下って平安時代末の住居址3基確認されている。いずれも一辻4m前後の方形を呈すると推定されるが、確認できた壁も1~2cm程度で遺存状況が良くない。これらの住居からは、11~12世紀の糸切底の削り出し高台付きの土師壇が検出されている。このほか、住居址の周囲を画くするように検出された溝状遺構SGD01、SGD14もこの時期の所産と考えられる。

3-3 中世遺構

テラス造成

調査区内の中世遺構確認面をみるとW1ライン、W5ライン、W8ライン付近に造成段差を確認することがで、この間が東側から西へと階段状に下るテラス造成が行なわれたと考えられる。このテラスを東側よりG1~G4テラスと呼称することとした。また、このテラスは検出された水路底の段差としても認められ、段差部分には、滝壺状の窪地と滝壺の手前

水路底の侵食やその補修を行った形跡が見られた。なお、G3テラスは第2期の東郭東門内広場の造成によりW6ライン付近で2分されている。

テラス名	東西幅	備考
G 1 テラス	19m	調査範囲内
G 2 テラス	17m	
G 3 テラス	17m	
G 4 テラス	6 m	調査範囲内

水路、溝

検出された水路、溝には底に粘土や砂利が堆積し常時水が流れていると考えられるものと、その形跡があまり無く、雨水排水や区分の役割もっていたと考えられるものがある。

主幹水路

SGD04系 SGD04は、調査区北半を西流する台形状の素掘り水路で32mが確認された。テラス段差部には滝壺状の窪地があり、G2テラス部分の滝壺手前には侵食された水路底に小石を詰め左岸護岸に石積を施し修復した形跡が見られたが、G1テラスでは侵食された底部がそのまま検出された。これは迂回水路の設置に伴う使用期間の違いが反映していると考えられる。滝壺の手前部分にはいずれも、使用期から廃絶時にかけてかわらけや瓦質雜器類の破片が比較的多く検出されており、滝壺の手前部分が水場的に利用されていたと考えられる。なお、この水路の埋設時期をうかがわせるものとして、W3ライン手前に南側から投げ入れられた砾群と共に検出されたかわらけと陶磁器がある。SGD09はG1テラス西端段差部分の滝壺から始まりSGD04に合流する水路で、上流部分が検出されず、水路内部は砂利により埋めつくされ、水路というより水を含んだ砂利の廃棄水路として利用されたと考えられる。SGD03とSGD08は連続した水路であったと考えられ、同様にG1テラス西端部分に滝壺を伴い、この水路の新設により合流点以東のSGD04水路はその役割を終えたと考えられる。

SGD05 SGD04の北側5mから検出された西流する水路で、25mが確認された。G1テラス西端段差部分に滝壺が認められ、滝壺の手前水路底には礫を埋設し侵食を改修した跡が認められた。G2テラス部分では上部幅2.4mを計り、東郭東門前広場に隣接し、堀的役割も兼ね備えていたと考えられる。W3ライン付近以西では、右岸のみ護岸石積みがあり、G3ラインの西側2m程がさらに一段高く積まれており、対する左岸に土台を伏せたと考えられる段差が認められたことから、この部分に木橋が架せられていたと考えられる。

現在水路 SGD05の北側6mにあり、江戸時代は深沢用水、現在は柏尾堰と呼ばれている。現在の流路は、大善寺東方の深沢川より取水し、大善寺境内を東西に横切り、夏秋、水上屋敷を抜け、御所地内で北方東に向分け岐し、さらに西進し、現在の塙山市川大門線の手前で屈曲し、甲州街道を横断し、小佐手小路を北進するよう流れしており、明治25年の分間図、正徳6年の検地直後の勝沼村検地絵図、寛文12年の小佐手村、勝沼村、等々力村用水堰争絵図、甲州街道勝沼宿開設時の元和5年の勝沼村上組絵図等から現行流路が江戸初期からほとんど変化していないことが確認できる。今回の調査で、SGD05と併走する部分に

については、SGD05と重複する掘建柱建物遺構SGB06・05が建設された時点で、これと共に存できる現行水路に流路変更されたと考えられる。

SGD35 №6N3杭付近から南西方向に流れ下る水路で、調査区の北端部分で水路幅が急激に広がっており、この北側にSGP01と同様な水溜の存在が予想される。南西端はSGP02により破壊されその先を確認することができなかったが、SGP02の東壁際に滝壺を版築により埋設し、滝壺手前水路底の侵食部分を埋め南に流路変更した跡が確認された、遺物は少ないが第1期段階の小型かわらけが検出されている。なお、滝壺の存在からこの付近に当初テラス段差が存在していたと考えられる。また、流路方向はこの付近の自然傾斜の等高線に沿うよう設定されている。

SGD30 SGP01から南に向かって流れ下る水路で、SGD25を埋める盛土層を切って構築されており、底部には粘土と砂利の堆積がみとめられた。近代の暗渠排水路が重複しており、遺物の量は少ないが第1期のかわらけ、和はさみが検出されている。なお、この水路の流下方向は、この付近の自然傾斜の方向に逆行するもので、かなりの造成工事を伴っていたと考えられる。

SGD33 SGP02の南西端に取り付く出水路。幅員2.5m、深さ0.75mを測る台形状の水路で調査範囲内で4.5mが確認され、ワインセンター取り付け道路を挟んで、東郭東辺土塁に突き当たることから、道路下で西に流路を変えていると考えられる。内部には粘土と砂利の堆積が認められ、さらにSGD34が新設された時点でSGP02の接点部分が大型の石材を用いた石組SGX05で閉塞されており、その後さらに幅3mにわたって多量の石材を投げ入れ、その上部両端に列石SGX04、SGX08を設けていることから、埋設後この部分を土橋として利用していたと考えられる。なお、土橋構築前は、調査区南端で、水路両駆の上部より内部に石材を詰めた甕みが検出されており、調査区南側道路下の調査成果を待ちたいが、桁橋の主桁を受けた施設ではないかと考えられ、木橋の存在が想定される。

SGD34 SGP02の南辺より6m北側に設置された推定幅2.5m、深さ1.01mを測る出水路。本水路は SGD03が石積 SGX05等により閉塞されるに伴い新設されたもので、この出水路変更は、水路を新設することにより起こった水路底の侵食の進行範囲から、水溜SGP02に中央石積SGX03が構築され規模を半減して以後行われたと考えらる。

排水路

SGD12 幅60~80cm深さ20~60cmを測るG1テラスの西端にはじまりG2テラスを東西に抜けSGD16に至る長さ13.2mの溝で粘土堆積等が無いことからG1テラス北屋敷の雨水排水施設と考えられる。

SGD16 幅1.8~2.0m深さ60cmを測り、№4N1グリッドから始まり、南流する断面台形状の溝で調査区内で24mが確認された。西壁が土壘SGA01の盛土斜面に接続することから、土壘に伴う廻と考えられる。溝の底部からは第2期のかわらけが検出されているが、北半域では、上部に第2期かわらけや焼成壁土塊、木炭を含む層が覆っており、第2期の後半段階では機能を失っていたと考えられる。

SGD17 幅0.7~1.3m深さ20~40cmを測る北流する溝、調査区内で23mが確認されたが南北両端とも終息していない。溝内部からは第2期かわらけが検出されており、南端側は

次第に小規模化しており、いずれ近い位置で終息していると考えられ、北端は水溜SGP01と重複していることから、把握が困難であったが断面では調査区外におよんでいる。東壁の立ち上がり面が土壘 SGA01の盛土斜面に接続することから、土壘の郭内排水施設、土壘脇側溝と考えられる。

掘立柱建物

検出された建物造構はすべて掘立柱建築で、内郭部の建物がすべて礎石建築であるのとは、対称的である。今回の調査で発見された建物は図表6の18棟で、これらの建物はA～Dの4箇所に集中して確認された（図表5）。

A群	G1テラス北半域	10棟
B群	G1テラス南半域	4棟
C群	G2テラス	2棟
D群	G3テラス	2棟

A群建物

G1テラス北半のA群は10棟の建物が重なりあって確認され、これらはさらに規模や位置から5つのグループに分けることができる。

- ① テラス西にある2間四方の小型建物 SGB14、SGB15
- ② テラス西にある2間3間以上の南北棟大形建物 SGB08、SGB09
- ③ テラス西にある2間2間の南北棟建物 SGB07、SGB10
- ④ テラス東にある1間2間の小型建物 SGB11、SGB12
- ⑤ テラス東にある2間3間以上の南北棟大形建物 SGB05、SGB06

テラス西側の①②③のグループでは柱の重複関係から③が最も新しく、①は溝SGD04と共に存できるが②は共存できない関係があり、①②③の時期変遷がうかがえる。テラス東では④⑤共に溝 SGD04とは共存できない関係にあり、さらに⑤は溝 SGD05とも共存できない関係にあることから古い順に以下のように変遷したと考えられる。

- 古 ① SGD04等と共に存
- ↓ ②④ SGB05と共に存
- 新 ③⑤ 現在の水路と共に存

さらに、①では直進するSGD04と共に存できるSGB14が迂回水路SGD09-SGD03と共に存できるSB15より古いと考えられる。②と④は主屋と副屋の関係と考えられ位置関係からSGB08とSGB12、SGB09とSGB11がそれぞれ対を成すと考えられ、新旧関係の決め手は無いが、SGD04と直交する軸線をもつSGB08が古いと考えられる。③と⑤の関係も主屋と副屋の関係と考えられ、軸線の一一致と位置関係からSGB09とSGB06、SGB07とSGB05が対を成すと考えられる。新旧関係の決め手は無いがSGB06は②と類似性が認められるのに対し、SGB05は近世の民家建築との類似性が指摘でき06、05の順で推移したと思われる。これらの関係を図化したのが図表8であり、これをまとめると掘立柱建物A群は大きく3期に区分され、それぞれがさらにA、B 2小期に区分される変遷をとったと考えられる。

時期区分	小 期	主屋 副屋	共存水路
第1期	第1A期	SGB14	SGD04
	第1B期	SGB15	SGD03
第2期	第2A期	SGB08 SGB11	SGD05
	第2B期	SGB09 SGB12	SGD05
第3期	第3A期	SGB06 SGB10	現在水路
	第3B期	SGB05 SGB07	現在水路

B群建物

A群の南に位置する建物群で2グループに分けられる。

①2間2間以上の東西棟建物 SGB02、SGB22

②2間2間以上の南北棟建物 SGB01、SGB23

①と②の新旧関係を直接決める資料は無いが、①のSGB02・SGB22はA群②のSGB08・SGB09と使用尺度や立柱方法が一致しており、②には桁行方向の柱間に異なる尺度を用いるなどA群の⑥と共通するものがうかがえる。なお、B群建物群は、井戸SGE01とSGE02が伴い独自の入水手段をもっており、建物が何れも大型で、土屋のみの単棟構成ではあるがA群とは別の家臣屋敷と考えられる。

時 期	小 期	主屋	井戸
第2期	第2A期	SGB22	SGE02
	第2B期	SGB02	SGE02
第3期	第3A期	SGB23	SGE01
	第3B期	SGB01	SGE01

C群建物

G2テラスに所在するC群は、東郭東辺土塁SGH01の盛土層の下部より検出された遺構で2棟のみであるが2間四方の東西棟建物で、規模や柱穴を手のひら大小の小石を入れて埋設する手法や、桁ないし梁方向の中柱を欠くなどの建築方法からA群①と共通性がみられる。SGB25とSGB27の新旧関係については、台形状態を呈するSGB26が古いと思われる。

時 期	小 期	主屋	共存水路
第1期	第1A期	SGB26	SGD04
	第1B期	SGB27	SGD04

D群建物

G3テラスに所在するD群は、SGB29・SGB30は、水溜SGP02の大規模な掘削により一部しか検出できなかったが、釘やかわらけなどの分布から、A群①やC群建物と共通した建物構造を有す建物が存在していたと考えられる。新旧関係についてはSGD35の水路との共存関係から、SGB30が古いと考えられる。

時 期	小 期	主屋	共存水路
第1期	第1A期	SGB30	SGD35
	第1B期	SGB29	SGB30



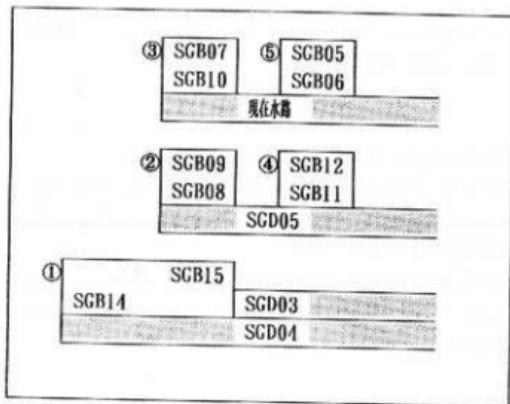
图表5 外郭域G地区掘立柱建物集中状況図

图表6 外郭域G地区掘立柱建物一覧

群	細別	遺構番号	規 模 (m)		間 数		使 用 尺 度		柱穴底	想定時期
			東 西	南 北	東 西	南 北	東 西	南 北		
A	①	SGB14	3.636	3.636	2	1	6	12		1A
A	①	SGB15	4.242	4.242	2	1	7	14		1B
A	②	SGB08	5.454	6.817	1	3	18	7.5, 5, 4, 3.5		2A
A	②	SGB09	4.545	7.272	2	2	7.5	12, 3, 4, 8	礫石	2B
A	③	SGB10	3.636	4.545	1	2	12	7.5		3A
A	③	SGB07	3.636	4.545	1	2	6	7.5	礫石	3B
A	④	SGB11	1.818	3.636	1	1	6	12		2A
A	④	SGB12	1.818	3.636	1	1	6	12	礫石	2B
A	⑤	SGB06	4.545	6.817	2	3	7.5	7.5		3A
A	⑤	SGB05	4.545	7.272	3	4	5	5, 7, 6	礫石	3B
B		SGB02	5.454	(6.817)	1	(3)	18	7.5		2A
B		SGB22	4.545	4.545	2	1	7.5	15		2B
B		SGB23	4.545	(7.272)	2	(3)	7.5	6, 12	礫石	3A
B		SGB01	3.636	7.120	2	4	6	6, 7.5, 4		3B
C		SGB27	3.636	3.636	2	2	6	6		1A
				4.242			7			
C		SGB26	3.636	3.636	1	(2)	12	6		1B
D		SGB30	3.636	(3.636)	2	(1)	6	(12)		1A
D		SGB29	3.787	(3.787)	2	(2)	6.25	(12.5)		1B

図表7 勝沼氏館跡外郭域G地区掘建柱建物群変遷図

時期	小時期	G1テラス	G2テラス	G3テラス	
第1期	第1A期	<p>SGB 14</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 3.636 (height), 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 27</p> <p>Dimensions: 4.24 (width), 3.636 (height), 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 30</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 3.636 (height), 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	
	第1B期	<p>SGB 15</p> <p>Dimensions: 4.242 (width), 4.242 (height), 2.12 + 2.12 (inner width), 4.242 (inner height).</p>	<p>SGB 26</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 3.636 (height), 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 29</p> <p>Dimensions: 3.787 (width), 3.787 (height), 1.89 + 1.89 (inner width), 3.787 (inner height).</p>	
第2期	(G1テラス)	北屋敷		南屋敷	
	第2A期	<p>SGB 08</p> <p>Dimensions: 5.454 (width), 6.817 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 5.454 (inner height).</p>	<p>SGB 11</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 3.636 (height), 1.81 (inner width), 1.81 (inner height).</p>	<p>SGB 02</p> <p>Dimensions: 5.454 (width), 4.45 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 5.454 (inner height).</p>	
第3期	第2B期	<p>SGB 09</p> <p>Dimensions: 4.545 (width), 7.212 (height), 3.636 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 12</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 3.636 (height), 1.81 (inner width), 1.81 (inner height).</p>	<p>SGB 22</p> <p>Dimensions: 4.545 (width), 4.45 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 4.545 (inner height).</p>	
	第3A期	<p>SGB 10</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 4.545 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 06</p> <p>Dimensions: 4.545 (width), 6.817 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 4.545 (inner height).</p>	<p>SGB 23</p> <p>Dimensions: 4.545 (width), 7.212 (height), 2.27 + 2.27 (inner width), 4.545 (inner height).</p>	
第3B期		<p>SGB 07</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 4.545 (height), 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	<p>SGB 05</p> <p>Dimensions: 4.545 (width), 7.212 (height), 2.12 + 1.81 + 1.81 (inner width), 4.545 (inner height).</p>	<p>SGB 01</p> <p>Dimensions: 3.636 (width), 7.120 (height), 1.81 + 1.81 + 1.81 + 1.81 (inner width), 3.636 (inner height).</p>	



図表8 G地区A群建物重複共存関係図

図表9 外郭城G地区柵柵掘建柱遺構一覧

所在 テラス	遺構 番号	遺構 方向	規模 規模	間数 尺度	距離 遺構	関連 理由	想定 時期	備 考
G1テラスA	SGB32	南北	2.12m	1	7尺	SGB05	方位	3B 柱根遺存
G1テラスA	SGB04	南北	4.24m	2	7尺	SGB06	方位	3A
G1テラスA	SGB17	東西	3.62m	2	6尺	SGB05		3B
G1テラスA	SGB18	東西	7.26m	2	12尺	SGB06		3A
G1テラスA	SGB21	南北	3.62m	2	6尺			1A
G1テラス	SGB19a	東西	12.72m	6	7尺		方位	3B 屢敷区分施設
G1テラス	SGB19b	東西	12.72m	6	7尺		方位	3A 屢敷区分施設
G1テラスB	SGB16	東西	4.84m	2	8尺	SGB01	方位	3B 建物の可能性もあり
G1テラスB	SGB03	東西	4.24m	2	7尺	SGB22	方位	2B
G1テラスB	SGB24	東西	1.81m	1	6尺	SGB23	方位	3A
G1テラスB	SGB25	南北	4.84m	2	8尺			2A
G2テラス	SGB20	東西	3.78m	2	6.25尺			建物の可能性もあり
G3テラス	SGB28	南北	20.08m	9	7x6 8x3		3	柱根遺存、外郭東門に接続するか
G3テラス	SGB31	東西	1.81m	1	6尺	SGP92		2

堀

確認された堀ないし柵と考えられる柱穴列は図表9のとおりで、敷地の区分施設、遮蔽施設として設けられたものと考えられる。

井戸

Giテラス、南屋敷の南西端で2基の石積井戸が検出された。

SGE01 内径1.10m、深さ1.56m、掘方の直径2.5mを測り、壁は人頭大から胸部大の石材を積み上げ、底部は風化した花崗岩を0.2mほど掘り窪めている。内部からは16世紀中葉に当たる常滑甌口縁部が検出されている。

SGE02 SGE01の南西に隣接して検出されたもので、内径0.7m、深さ1.0m、掘方の直径1.5mを測る。SGE01とは掘方部分で重複関係にあり、SGE02が古く内部からはかわらけの小片と漆膜が検出されている。

水溜

SGP01 G3テラスの北端、#6N2グリッドにある。調査範囲内で東西4.5m、南北2.5m、深さ0.6mを測る素掘りの水溜遺構。内部は土砂と粘土の堆積がみられ、南西隅にSGD30とつながると考えられる出水口があり、時期は埋没後、土壘脇溝 SGD17設けられていることや、検出されたかわらけ、15世紀初頭の青磁碗の高台部から第1期段階に当たると考えられる。

SGP02 調査区の西端、G4テラスから検出された東西6.5m、南北は調査範囲内で16.7m、深さ0.9mを測る素掘りの水溜遺構。入水箇所は調査区外であるが、出水口は南西端に水路 SGD33、西壁中央に水路 SGD34が設けられている。粘土と砂礫が0.2~0.3mほど堆積した後、中央に石積 SGX03を設け東半域を埋め立て、幅4.5mの水路形状に改修、さらにSGD33の出水口を大型石材を並べ閉鎖し、新たにSGD34を設け流路の変更を行っており、度々浚渫改修を行った形跡が見られるが、最終的には幅1.8mの水路となりその機能を終えている。本施設の役割は、多量の粘土、砂礫、さらにその中に含まれた自然遺物から、貯水を目的としたものではなく、幹線水路から直接水を引き入れた際、まず砂礫を取り除くために現在の水道でも設けられている入水溝に相当する役割を行っていたと考えられる。時期は、かわらけ及び、改修出水口の侵食箇所から発見された瀬戸広口瓶子、灰釉皿より第2期と考えられ、第2期の幹線水路 SGD05と直結すると想定すると南北方向は23.0m近い規模を有すこととなる。

広場通路空間

SGC01 G2テラスは、第2期以後建物等の遺構を設置した形跡が無く、外郭の土塁や堀と家臣屋敷領域との間に設けられた緩衝帯の役割をもつ広場ないし、通路として利用された空間と考えられる。

SGC02 SGP02と土壘脇溝 SGD17に沿い設けられた水路堤の段差により形成された空間は、門内の樹形とも想定される通路空間と考えられる。

土塁

SGA01 溝 SGD16と SGD17の間に、第1期建物遺構上面に高さ0.6m、幅7.3mにわたって盛土が行われおり、十畳の基底部と考えられる。南端は調査区外まで続くが、北端はSGD22までと考えられる。県立ワインセンター取り付け道路を隔てた南側H地区で確認されたSHA01とは食い違う位置関係にあり、屈曲して連続していたとすれば、SGD22とSGD05の間に虎口が、食い違っているとすれば、この両十畳の間に虎口が想定され、いずれの場合でもこの土塁の南北いずれかの箇所に東郭東門の存在が考えられる。

3-4 中世以後の遺構

水田遺構

土塁 SGA01と広場SGC01の領域を除き、中世遺構面の直上や盛土層上に水田床土層と水田耕土層がみられる。最も早く、水田化されたのは水溜SGP02の上面であり、この水田は元和5年勝沼上組絵図以前のものと考えられ、以後の水田面は勝沼上組絵図、正徳6年勝沼村検地帳および勝沼村一筆絵図に示された区画に一致している。また、石積水路SGD29は明治末年以後に建設された水田水路である。

葡萄畑遺構

調査区内で検出された直径10~20cmの柱穴は、水田耕土層が内部に落ち込んでおり、6~7尺の間隔をおいて面的な広がりをもって結ぶことができ、内部から葡萄の炭化種子が検出されたことから葡萄竹棚の杭と考えられる。また調査区内で検出された鉄砲土のほとんどがこの葡萄杭中より検出されており、近世以後の当地域における戦争史からみて慶応4年3月6日に起こった戊辰戦争の白兵戦の遺物と考えるのが妥当と思われる。なお、水田から畑への転換に伴い、江戸時代と明治以後の盲排水溝が6本確認されている。また、明治末年以後普及した針金網の設置に伴う支線穴および、戦後普及し現在でも盛んに造られている葡萄の剪定後の枝を埋め肥料とする地元でタコツボと呼ぶ土壌が多数確認されている。

建物遺構

G1テラス、北家臣屋敷の水田面上層より明治時代の遺物を伴う建物の土間、埋甕、ドカン排水施設、ゴミ穴、獨立柱建物遺構が検出されており、明治29年に始まった中央線建設工事にかかわった大倉組の事務所があったという伝えと結びつく遺構と考えられる。

4 遺物

4-1 中世以前の遺物

縄文時代早期末の織維土器及び前期末の諸磯式土器と共に伴う石鏃、打製石斧、石匙、擦り石等が発見されており、堅穴式住居に伴い、高台付き皿が検出されている。

4-2 中世遺物

青磁白磁 1、2、3は内面に劃花紋を施し屈曲した口縁部をもつ灰色がかった同安窯系青磁皿で、館以前12~13世紀の遺物と考えられる。4、5は龍泉窯系青磁碗B 2類の片切り蓮弁を持つもので4、5は水溜 SGP01から検出された。9は青磁碗C 2類の口辺部に雷紋、胴部におおきな線描の蓮弁を持つもので SGB27のわきから検出された。10は青磁碗D類の無紋の端反碗で幹線水路 SGD04から検出された。4、5、9、10は14世紀後葉から15世紀前葉とされる一群である。7は盤、9は壺の頸部、10は壺の口縁部である。11は胴部に大きい線描き蓮弁紋をもつ端反白磁碗である。

染付 12、13は染付皿B 1群皿VIで15世紀末から16世紀前半、14は16世紀末の染付碗F群ではないかと思われる。

陶器 15~18は灰釉端反皿、19~21は稜皿、26、27は天目茶碗、28~30は徳利、31~33は摺鉢で瀬戸美濃産の16世紀初頭から中葉のものである。22~25は北尾敷主屋 SGB05周辺から検出された志野丸皿で16世紀末葉にあたる。34は井戸 SGE01から検出された常滑産の甕で第11期16世紀前半のものであろう。この他、瀬戸美濃産の15世紀代の広口瓶の肩部が水溜 SGP02の底部から検出されている。

瓦質土器 35は内湾型火鉢で口辺部に菊スタンプ紋が見られ、36は縁折り外耳鍋、37~40は摺鉢で、いずれも幹線水路 SGD04、05から検出された。この外 SGE01の東側より信州系内耳鍋の底部が検出されている。

かわらけ 土師質皿類で、幹線水路 SGD04に伴うものは精選された粘土を用い、口径に比して底径が大きく、内側に膨らむ玉状口縁を持ち、丁寧な糸切り痕が見られる。SGD05に伴うものは胎土中に石英雲母粒を含み、ややふくやかな外反する玉状口縁を持っている。この外に口縁部断面が先細るものがある柱立柱建物 SGB23の脇から検出されており、おおむね3類の分類することができ、これが第1期~第3期に対応すると考えられる。また、再過熱を受け灰色化し溶融物が付着したり変形したかわらけが検出されている。

土製品 42、43は土馬、44鉛の舌その他サイコロ、碁石、円盤などの土製品が検出されて

おり、土製品ではないが土壁が過熱されたと考えられる竹小舞の痕跡を持つ焼成粘土塊47～50がSGB08の柱穴内やSGD16の埋設土上面から検出されている。

石製品等 45はガラス小玉、46はヒスイ玉で、この他に磁石、ヒデ鉢、打撃痕をもつ石英塊が検出されている。

金属製品 53の貨幣や角クギ類が大部分をしめるが、52の鈴、54の和ハサミ、51の鞘尻、55、56の鉄宰の他、鋸先、金具類なども検出されている。

木製品 水溜 SGP02、幹線水路SGD04、05より桶底、柄、板、漆椀片等が検出されている。

自然遺物 水溜 SGP02からクルミ、ヤマモモ、マツ、サクラ等の果実、枝、葉などが検出されている。

今回の外郭域調査で検出された遺物は、量的には内郭部に及ばないが、多様性においては内郭部を上回るものがある。年代的には14世紀後葉～15世紀前葉の一群と16世前葉から16世紀末葉までの連続する一群とに大別され、特に青磁および瀬戸美濃灰釉皿に注目すると、本県一宮町新巻本村出土の常滑の壺に納められた一括資料に対応する時期が欠失しており、前群が検出遺構から第1期、後群が第2期、第3期の年代を示すと考えられ、最終期は志野丸皿から武田氏が滅亡した天正10年(1582)までは存続していたと考えられる。また、遺物の組成からみると、瓦質内湾型火鉢と縁折外耳鍋は第1期特有な雑器で、瓦質摺鉢は第2期まで使用され第3期には美濃瀬戸産摺鉢に変わり、信州系内耳鍋は第2期以後現れるなどの変化を伺うことができる。

4-3 中世以後の遺物

近世遺物は比較的少なく、陶磁器、石臼などが盲排水溝中より検出されている。近現代遺物は同じく盲排水溝中やG1テラス北半の水田層上層建物遺構周辺から陶磁器、ガラス類、金属製品、骨製品、レンガ、ドカン等の建築材料も検出されている。

5 まとめ

1、IH地形の確認

調査区の現状地形は、東から西に、また北から南に下る傾斜をもっているが、調査の結果、南北方向の地山層面の本来の傾斜は現状とは反対に北の鳥居平の山裾側に下る傾斜をもっていたことが確認され、山裾との間に沢状地形が存在していたことを示している。これは、現在でも館の北方、柏尾山の西麓と日川扇状地とが接する部分にある沢地形、日川の旧河道一つと考えられている、と類似しており、大きく屈曲してはいるが本来一体のものと考えられ、この埋没沢を仮に、小字を取って東沢と呼称することとする。また、従来勝沼氏館跡の場合、山裾に近接した東郭一帯の防備方法が問題であったが、東沢の自然の沢地ないし湿地を利用し山裾と分断されていたことになる。今後の課題としては、この東沢を人工的に手を加え、より積極的防備施設として利用していたかどうかの確認になるであろう。

2、地形普請

査区内の第1期中世遺構確認面は、南側を地山層面まで削平し南北方向に平坦化し、さらに、東から西にむかって順次下るテラス状態で確認された。これは、時代は下が『高白斎記』大永七年(1527)正月廿五日の条の甲斐府内で行われた「南宮ノ西ノ地形平普請」の地形平普請に相当する造成遺構として把握され、扇状地が発達した甲府盆地縁辺部では、地域の計画的開発を知るうえで重要な遺構といえる。第1期に行われた地形平普請は第2期以後の郭配置や家臣戸数の区分の基礎となり、館や家臣屋敷廃絶以後、現在に至る土地区画にも影響を与えていたことが確認された。これは、内郭部において、第1期段階の段差を順次埋め立て造成し、平坦面を拡大する行為が時期推移の基本的流れとして把握され、各時期の平坦面構成がそのまま郭内の機能区分を意味しており、結果として第1期段階の地形普請が後の郭内利用区分にまで影響を与えたづけた状況とも符号しており、中世遺構の調査では、この地形平普請とその推移の把握が極めて重要であることが確認された。

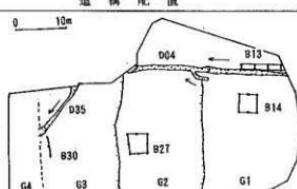
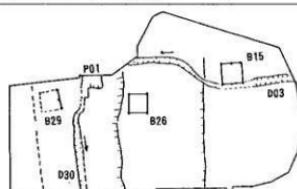
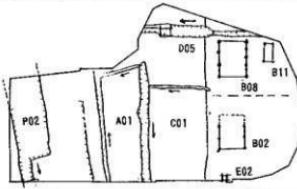
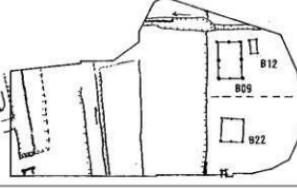
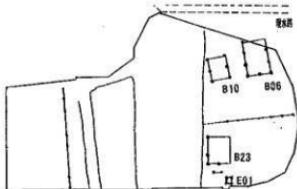
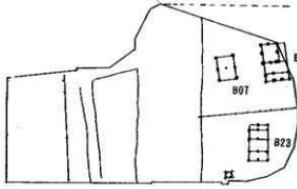
3、用水堰

館の北辺を流れる「深沢用水」は、大善寺保管の近世用水堰争い文書で寛正年間(1460~1466)に築かれたという伝承を伝えており、勝沼氏館跡の調査が開始された当初から館との関係が注目されていた。現在の「深沢用水」は大善寺の東方、深沢川より取水し、大善寺の境内を横断し、柏尾山南側山裾を流下し館の北辺を外郭線に沿って流れ、さらに館の町屋と考えられる小佐手小路を抜け、歲屋敷跡の横を流れ下っている。

調査区で、現在の堰流路と並走する2本の東西水路が発見された。SGD04とその北4.5mにあるSGD05で、SGD05の北側約5mが現在の流路でこの間に水路の存在する余地は無く、現流路は館の第3期段階で改修されたものが継承されて来た可能性が極めて高いことが把握された。初期遺構として確認されたSGD04は第1期段階の大規模な地形平普請と期を一に

勝沼氏館跡外郭域 G 地区遺構変遷模式図

図表10

時期	小期	年代	遺構配置	概況
第1期	第1A期	14世紀末葉か		<ul style="list-style-type: none"> 西に向かって下る大規模なテラス造成が行われる。 各テラス西端に2間四方の小規模な獨立柱建物を1棟づつ配置 引き水水路が設けられる
	第1B期	15世紀初頃か		<ul style="list-style-type: none"> G1テラスでは水路を南北回し、建物を北に移動させる G2テラスでは建物を北に移動させる 瓦質雜器の使用が顕著に見られる G3テラスに引き水施設
第2期	第2A期	16世紀初頃		<ul style="list-style-type: none"> 引き水水路を北に移動し、G1テラスを南北に二分し家臣屋敷とし、南の屋敷には井戸を設ける 共にテラスの西端に大型の主屋を配置し、北屋敷では副屋も設ける G2, G3テラスに土壘、塀、土壇築溝を南北に設ける 東郭内部に受水用の水溜と水路
	第2B期	16世紀前葉		<ul style="list-style-type: none"> 家臣屋敷内の獨立柱建物をほぼ同規模で若干向きを変えて建て替える 土壘に伴う堀はこの時期にはすでに埋設されていた可能性あり 東郭内の受水施設を水路化し、流路を変更する
第3期	第3A期	16世紀中葉		<ul style="list-style-type: none"> 引き水水路をさらに北側(現在の水路位置)へ移動 北家臣屋敷は主屋を東側に副屋を西に配置する 南屋敷では井戸を掘り変える
	第3B期	16世紀後葉		<ul style="list-style-type: none"> 北屋敷の主屋は柱間寸法を場所により使い分け、建物内部の部屋割りも見られるなど近世民家建築に近い状況を呈するようになる 志野焼小皿を伴う 南屋敷は主屋を東に移す

していることがテラス造成の段差ごとにみられる池壺から伺え、第1期段階にこの堰が構築されたと考えられる。

4、家屋構造

建築技法面から発見された建物群を検討を加えると第1期は、

- 1)方2間と小規模な側柱建築と両一的である
- 2)歪んだ建物も存在するが、ほとんどが、直交する軸線上に柱穴を配置する
- 3)4辺の柱の内、向う2辺の中柱を欠失する建物が見られ、小屋組は投首構造をではないかと思われ、棟の方向は各テラスごとに別である

第2期は、

- 1)第1期に比較すれば規模の拡大が著しい
- 2)残存柱根から直径20cm前後の丸太材を柱とする側柱構造の建物である
- 3)柱の位置は直交する軸線上にすべて設定される
- 4)第2A期とした建物では、妻部分も含め中間柱を欠失しており、梁行5.45mを両端だけで支えるのは構造的に無理があり、梁構とては確認しにくい何らかの方法で支え柱を組み入れていたと思われれ、屋根は投首構造の草葺の入り母屋造りか、軽量な和小屋の板葺き切り妻造り構造と考えられる。第2B期でも側柱構造は継承されているが、妻部分に棟持ち柱が使用されており、屋根は投首構造の草葺切り妻造りか板葺切り妻造りと考えられる。
- 5)第2期の北屋敷建物では、主柱穴は直径50cm前後を測るが、桁方向の柱間に直径25cm前後の小型の柱穴が確認されており、この時期の建物の特色となっている。この南柱は、すべての柱間に存在しないことから、上間構造の建物外壁に出入り口なし窓などを取り付ける添え柱として設置されたと考えられ、第2A期 SGB08では、西壁の北から2間目を主柱穴の配置間隔を変え出入り口部を構成させているのに対し、第2B期 SGB09では副柱穴を配することにより実現しており、建具等の利用技術の進歩が背景にあるのではないかと考えられる。なお、出入り口は、冠木を備えたものと推定される。
- 6)外壁については、SGB-08の柱穴より、木舞を組合せた痕跡をもつ焼成粘土塊が検出されており、土壁であったと考えられる。
- 7)建物の内部空間は基本的には一室構造と考えられるが、SGB-08の場合南から1間目、SGB09では建物中央を境に窓を持つ空間と北の出入り口を持つ空間とに利用区分があった可能性が考えられる。
- 8)北屋敷建物は建物の入り口部前面に副屋を伴っており、機能についていっては1間2間の規模と位置から馬屋と想定される。
- 9)第2期建築は、町田家本洛中洛外図の右雙（下京雙）第五扇の神楽岡付近の農村家屋や、上杉本洛中洛中圖左雙（上京雙）一扇の上賀茂、右雙第五扇の聖護院の農村家屋に類似性を求めることができると思われる。

第3期建築は

- 1)第3A期建物は第2B期の建物を継承する棟持ち柱を備えた側柱構造の建物であるが、第

- 3B期に至ると内部柱を備えるようになり内部空間の部屋割りが想定されるようになり建築的にみると第3A期と3B期の間に画期を見いだすことができる。屋根は、第3B期の場合、小屋組をもつ切妻造りとして復元される。
- 2)第3B期建物には柱穴底部に平石を据えたものが多く見られ、この時期の特色となっている。新たな建築技法なのか、立て替え等による柱高の調整方なのかは定かでない。使用された柱は、柱底および残存柱根より直径22cm前後の丸太材である。
- 3)内部空間は第3B期の北屋敷主屋 SGB05が梁間3間取りで、甲斐における近世民家の室名呼称に当てはめてみると南から1間目がウマヤ、2間目がドジ、3・4間目の西2間がイドコ、東1間が NANDOと想定され、南屋敷主屋 SGB01は梁間2間取りで、南から1間目がウマヤ、2間目がドジ、3間目がイドコ、4間目が NANDOと想定され、いずれも近世民家間取りの相形と考えられている2室間取りの建物に該当すると考えられる。
- 4)第3B期北屋敷建物には主屋の半分ほどの規模をもつ副屋をともなっている。この建物は、主屋の背後に位置づくこと、柱間の取り方、また SGB05が内部に馬屋と想定される空間をもつことなどから馬屋ではなく蔵と考えられる。

5、家臣屋敷

今回の調査で確認された3期小6期の建物遺構は、いずれの時期においても、区画された敷地の中に建物が配置されており、本館に伴う町屋遺構が未調査なため比較検討できないが、家臣屋敷であると考えられる。ただし、第1期遺構については、地形平肯請された区画の隅に小規模な建物を配置しており、残された多くの領域については耕地としての利用も十分考慮されること、水路や樋を利用し運鉢作業等をおこなっていた形跡がみられることなど、その性格付けについてはまだ検討の余地があると考えられる。

第2期以後についても、刀装具の発見以外積極的に家臣屋敷を肯定する遺物に乏しいが、館の東郭東門に近接して設けられていること、北屋敷は第1の飲料水の郭内引水点に設けられていることなど館の防備上、重要な位置に設定されていることから、勝沼氏直属の上級家臣の屋敷とするのが妥当と考えられる。

なお、区画施設は、洛中洛外図や福井県・乗谷朝倉氏遺跡の武家屋敷のように水路や築地により厳格に区分された都市型の区画とは異なり、段差や遺構の空白部分の存在など、生け垣等遺構としては確認しにくい施設の存在の可能性も含め、緩かな区分方法により屋敷領域が確保されていたと考えられる。このような領域確保の方法は、青森県浪岡町の浪岡城北館の家臣屋敷や長野県金井城跡などに見られ、地方的な区分方法として今後類例が増加するように思われる。

また、勝沼氏館跡家臣屋敷建物の大きな特色は、第1期から第3期まで、いずれも掘立柱建物であることで、内郭部では第1期段階ですでに礎石建物となっていることと対照的であり、15世紀から16世紀末葉までの200年近い歳月この違いが守られていたことになり、建築技法における社会規制の存在が無かったとは言い切れない状況であると考えられる。その主なものは

- 1)、据立柱を用いること
- 2)、丸太柱を用いること
- 3)、内部は土間が主体を占めること
- 4)、土壁を用いること

などで、外観としてその違いが顕著にみられる。

また、第2期から第3期のC1テラス北屋敷と南屋敷を比較すると、主屋の規模と棟数に80年近い歳月継承された差異があり、家臣団の中においても建築上の社会規制の存在が伺える。

ところで、館を取り巻く屋敷の発見は、甲斐において家臣団の主館周辺への集住慣習が、15世紀初頭にはすでに始まっており、16世紀初頭には居住機能を主体とした武家屋敷群が在地の館周辺にも形成され、内郭部、外郭部、家臣屋敷帯の重層構造が、甲斐における館の基本構造であり、寄親寄子関係による家臣団支配の方法に対応した館構造と考えられる。

6、繩張りの変化

内郭部調査および、昭和52年度の遺跡範囲確認において、館の第1期から第2期への移行期に館の大規模な改修が行われたことが確認されていたが、今回の調査でも第1期段階で郭外屋敷領域であった場所に、土壘 SGA01と堀 SGD16、土壘脇溝 SGD17が新たに構築され郭に組入れられた様子が明らかにされた。これに伴い、家臣屋敷は土壘と堀の外側に設けられた幅10m近い広場ないし通路と想定される無遺構地帯 SGD01以遠に位置づけられることになり、土星により取り巻かれ東郭となった領域には、大規模な受水槽、SGP02が設けられた。この位置は第1期段階で幹線用水堰から内郭部に屈曲させる水溜と水路の分岐点に当たっており、東郭の設定目的の一つに、水の安定確保が有ったことが明らかにされた。東郭の拡大に対応し内郭部正門にあたる北門側に北西郭を設け、さらにその外側に北郭を設け、厳重な防備構造を構築しており、第1期から第2期の変化は城塞としての機能の充実であったことが改めて確認された。

7、水処理施設の確認

勝沼氏館跡内郭部の第2期遺構の特色は、石積みの水路や水溜めが整備されていることがある。内郭部の調査で、第2期の水路の水は東郭側よりもたらされることが明らかになり、さらに東郭C地区の調査で東から西へと向かう2本の石積み水路が確認され、昭和52年度遺跡範囲確認調査で、外郭域H地区で南北12m東西25mの規模を有すと推定される、多量の粘土堆積を伴う大規模な石積み水溜めの存在が確認され、その後、内郭部東門にいたる内堀の橋梁施設確認調査の折り、近接2重堀の中間帯に設けられた切り通し通路が検出され、この通路下に樋を埋設したと思われる溝の存在が確認され、通路部分から内堀に掛けられた木橋下に木樋を付し、サイホンで内郭部に水を引き入れる手法の存在が推定されるようになった。なお外堀を渡す手法については、東郭C地区の調査で底部に水が溜まっていたことが確認されており、日川の急崖に面した何れかに土橋が存在するはずで、位置

は中間帯の切り通し通路の延長線上と考えられるが、この土橋部分に何らかの施設の存在を考えることができる。

今回の外郭域調査の目的の一つは、日川の急崖側で確認してきた内郭部への引水経路と、館の北辺を通過する深沢用水との関係を探ることにあった。調査により、埋設廃棄された、第1期、第2期の深沢用水路の発見と、東郭内に設けられた、第2期の大規模な素掘りの水溜め、さらに、県立ワインセンターの取り付け道路を隔てたII地区の水溜めに向かう素掘り水路の発見により、第2A期に限って見た場合

- 1) 素掘り幹線水路（深沢用水）SGD05
- 2) 東郭内素掘り水溜め（受水槽）SGP02
- 3) 東郭内素掘り水路SGD33
- 4) 東郭内石積み水溜め（沈殿槽）SHP01
- 5) 東郭内石積み水路SCD02
- 6) 外堀土橋内水路
- 7) 内堀木橋下木樋
- 8) 内郭部石積み幹線水路SD04

という、各部分が完全に結接された状態ではないが、おおよその引き水経路が想定することができるようになった。特に砂利や植物などのゴミを取り除く受水槽と、粘土を取り除く沈殿槽の2重の水処理は今日の水道水の処理方法と共通性が見られ、水処理技術がかなり進んでいたことが明らかにされた。

なお、幹線水路においても、テラスに従い階段状に水を流下させており、流速を変化させることにより、沈殿機能を備かせ、淹壺の手前部分で取水していたことが、雑器類の検出状況から伺え、家臣屋敷領域においても小規模ながら浄水機能を活用していたと考えられる。

8、第1期館の主

勝沼氏以前の館となる第1期造構は、今回の調査でおおよそ年代が1400年前後と推定されるようになった。内郭部第1期造構については、

- 1) 東辺土塁の中央に正門をもつこと、
- 2) 中心建物が正門に対し、棟を見せるように建ち、町田家本や上杉本の落中洛外図の公方邸や細川官領邸などに近い建物配置をもつことなどが明らかにされてきた。今回さらに、
- 3) 大善寺境内を通りぬける深沢用水は第1期段階で構築されたこと
- 4) 外郭域のかなり広い範囲まで地形平譜踏を行い屋敷群を配置していること
- 5) 縁折り外耳鍋という勝沼氏館跡特有の個性的什器がこの期に属するものであることなどが新たに確認された。

1) は第2期とは正反対に国中地方（甲府盆地中心地域）に対し警戒する意識の現れと考えられ、2) は守護に近い地位を現す建物配置と理解され、3) も同様に守護に近い権力を背景とし、しかも大善寺との関係も良好であること、4) は単に館を構築しただけで

はなく、周辺に家臣等の居住環境も整備したこと、5) は信濃系の内耳鍔の分布圏に位置付けられる甲斐に、独自の生活什器の文化を形成していたことと解される。

なお、1400年前後甲斐において、館の伝承のない守護は、応永二十三年(1416)関東で起こったの女婿の上杉禅秀の乱に加担し、翌年木賊山(東山梨郡大和村)で自害した武田信満とその弟信元が挙げられる。信満の父信春は、正平十年(1355)柏尾山に陣し、園中の御敵に対峙し勝利している。この時、大善寺の衆徒に土地の寄進を約束して戦勝の祈祷をさせており、信満の代においても大善寺との関係は継承されていたと思われ、また戦略的にこの地域が良いことも知っていたと考えられる。信元は信満の弟で、信満の敗死後、信満の子信重とともに高野山に逃れていたが、幕府は信元を守護に任命し、帰国したものもなく死亡し、応永二十八年(1421)には信重が守護に命じられている。

9、勝沼氏以後について

甲陽軍鑑によれば勝沼氏は永禄三年(1562)に逆心の文あらわれ武田信玄に御成敗され、同心被官は二百騎が跡部大炊助に預下され、八十騎が武田信廉に進め置かれ、再被官したとされる。ところで、今回の調査で第3B期のG1テラス北家臣屋敷の主屋に伴い志野の小皿が、さらに、第2期水路の埋め立て層上部から折り縁灰釉小皿が検出されている。志野小皿は付随する遺構の特定はできなかったものの内郭部でも検出されており、これら16世紀第4四半期の位置付けをもつ遺物の発見により、郭内、郭外もこの時期まで利用されていたことになり、勝沼氏の滅亡期の再検討と同時に勝沼氏廃絶以後のこの館の利用状況も再検討されなければならないこととなった。

写真 1



■平成 5 年度調査区全景

写真 2



■平成 6 年度調査区全景

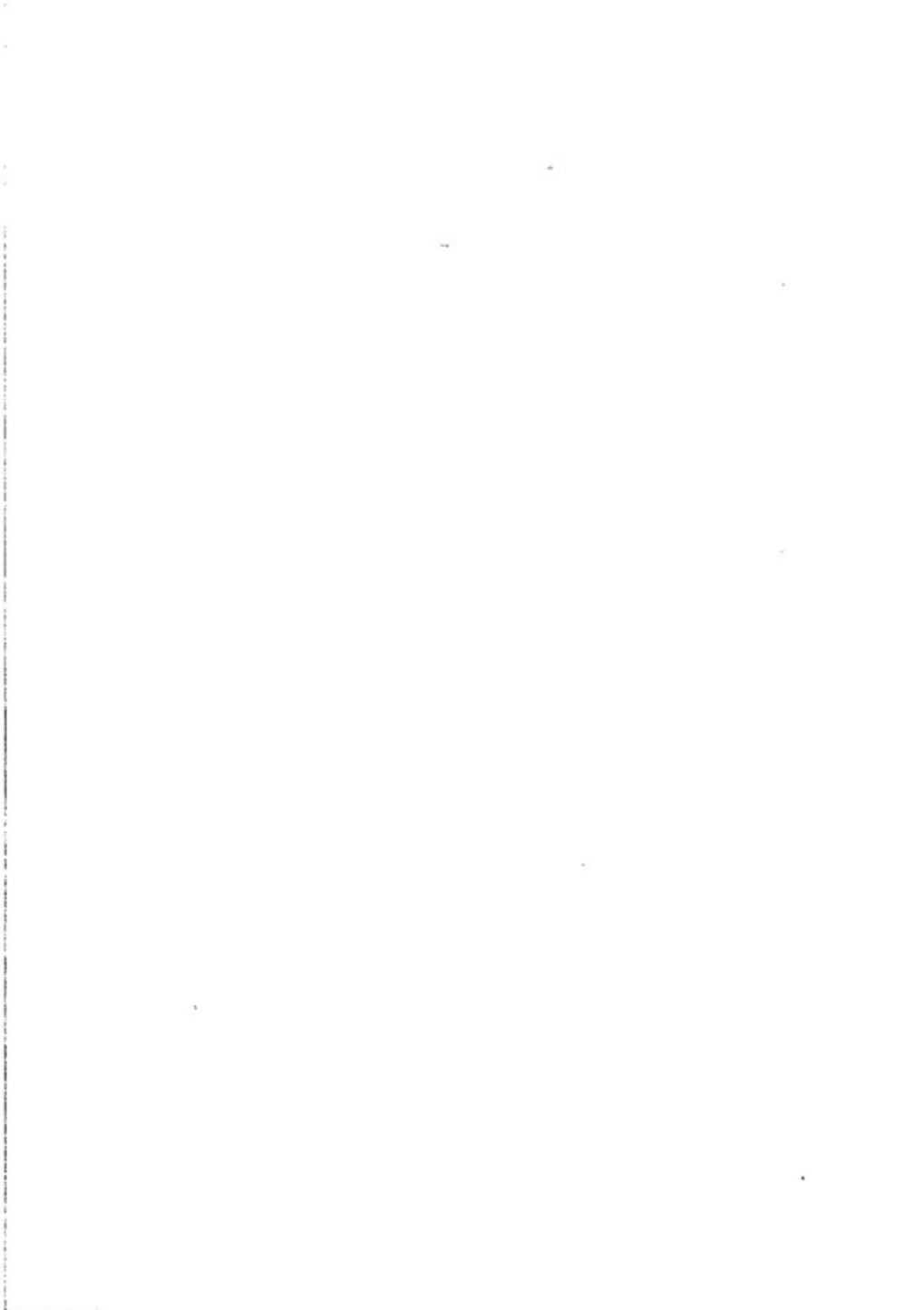


写真 3

■出土磁器



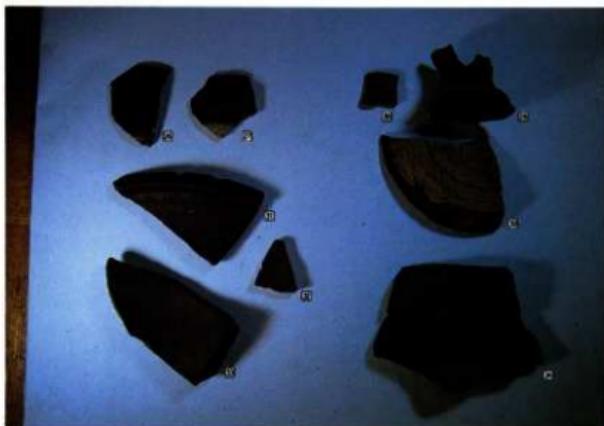
写真 4

■出土陶器



写真 5

■出土陶器



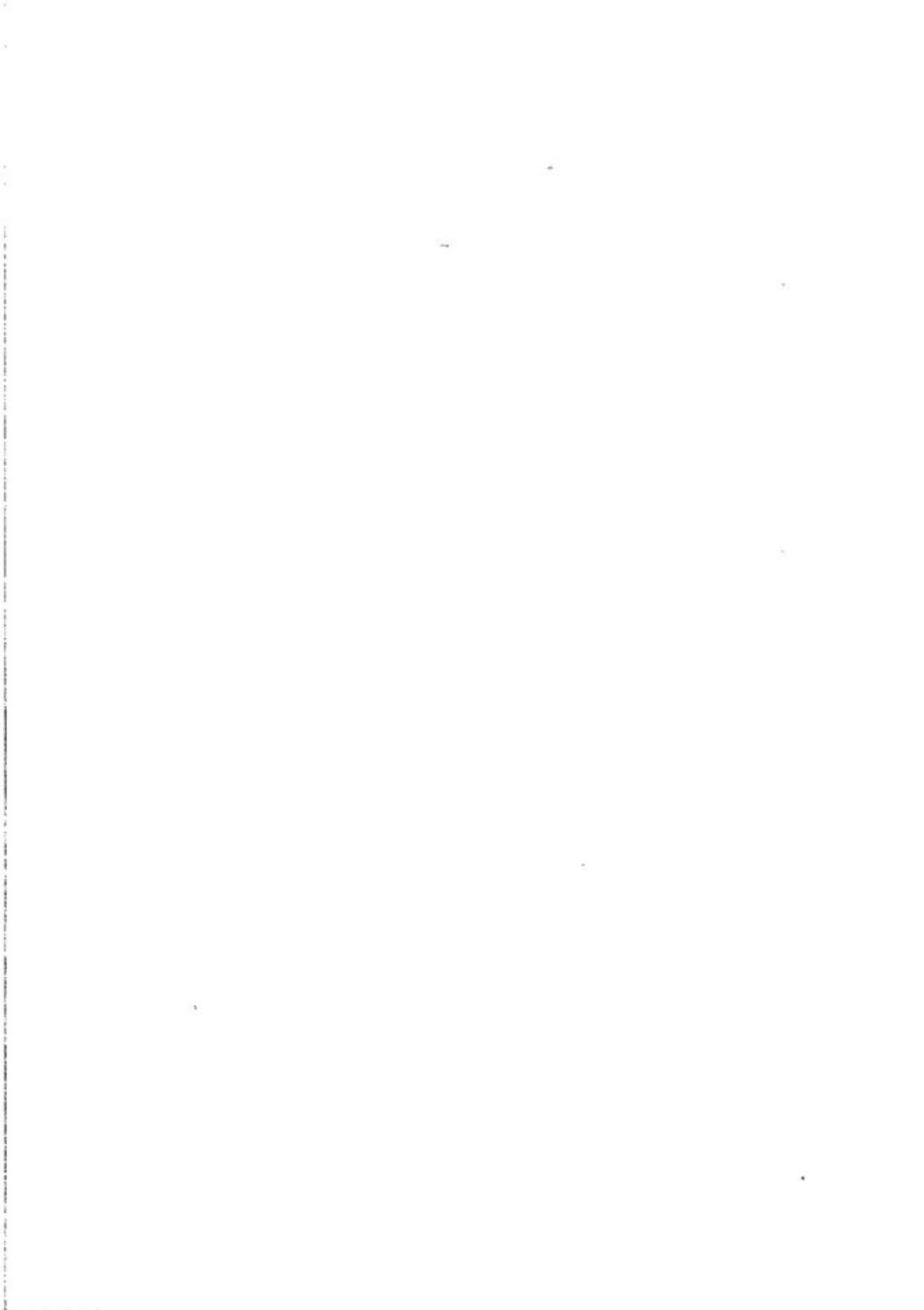


写真 6

平成 4 年度
調査区全景

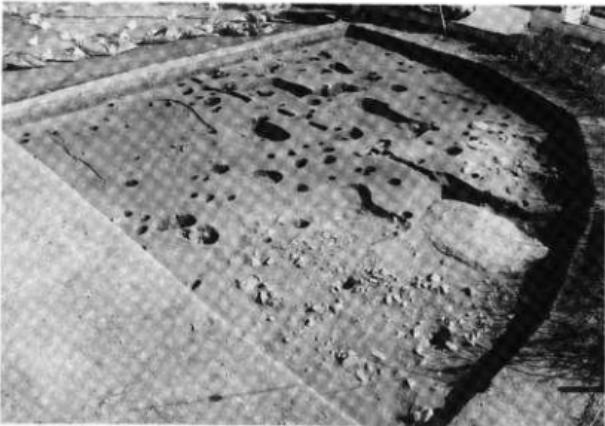


写真 7

掘立柱建物
SGB01 柱穴



写真 8

ヒテバチ検出
状況

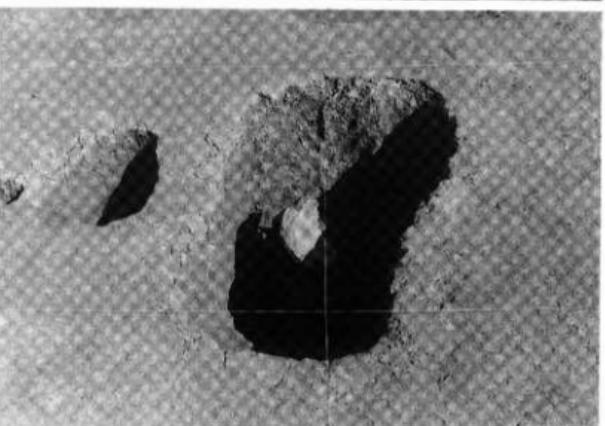




写真9

G1テラス北屋敷
掘立柱建物群



写真10

幹線水路系
SGD04, SGD08,
SGD09



写真11

幹線水路 SGD04
埋土遺物出土状況

写真12

幹線水路 SGD04
淹壺手前雑器類
出土状況



写真13

幹線水路 SGD05

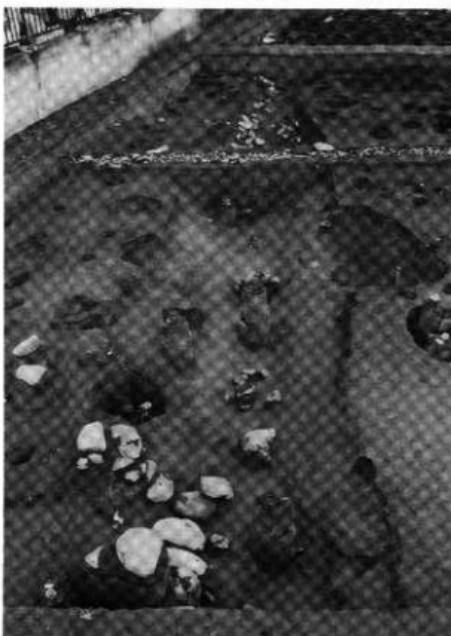




写真14

平成6年度
調査区全景

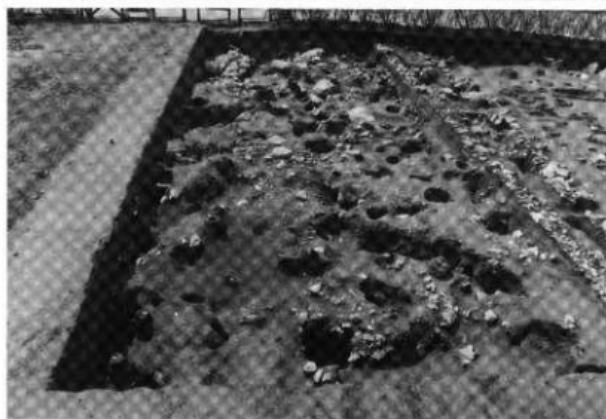


写真15

G1テラス南屋敷
掘立柱建物群



写真16

土壠SGA01と
土壠脇溝SGD17
(北西より)

写真17

掘SGD16の
終端状況
(北方より)

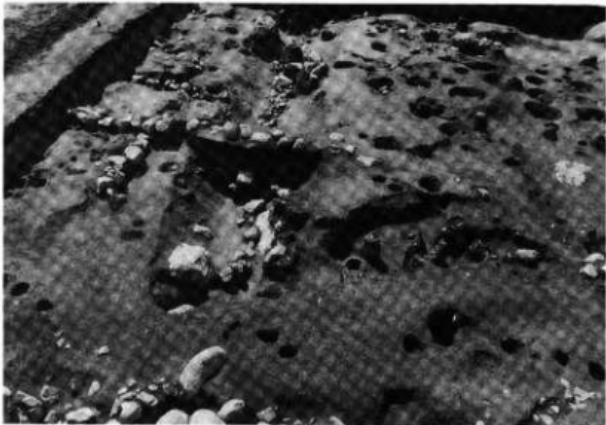


写真18

水溜SGP01
(西方より)



写真19

石積井戸
SGE01



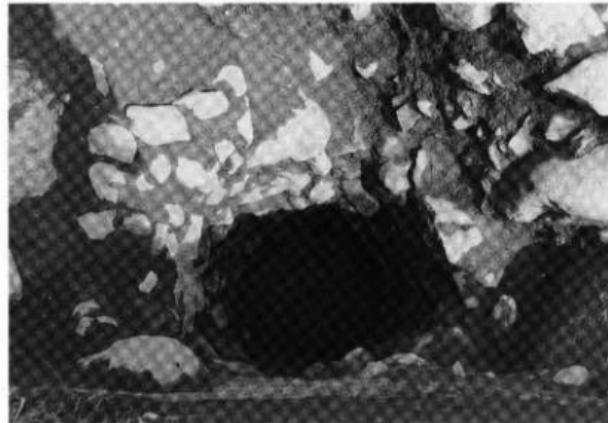


写真20

石積井戸 SGE02

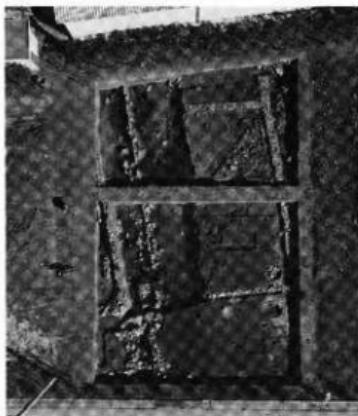


写真21

平成7年度
調査区全景
(真上より)



写真22

平成7年度
調査区位置
(東方より)

写真23

水溜SGP02

全景(南西より)



写真24

水溜出水路

SGD33と閉塞、

土橋設置状況



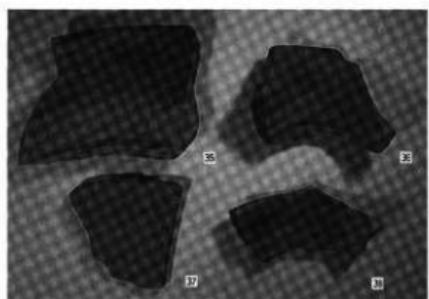
写真25

通路空間

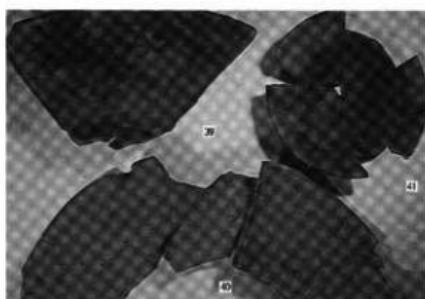
SGC02

(北西より)

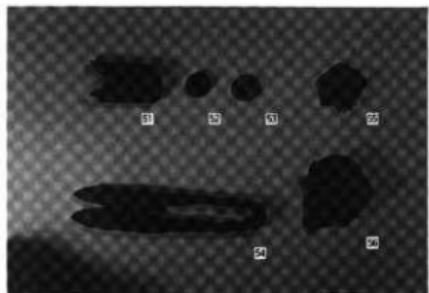




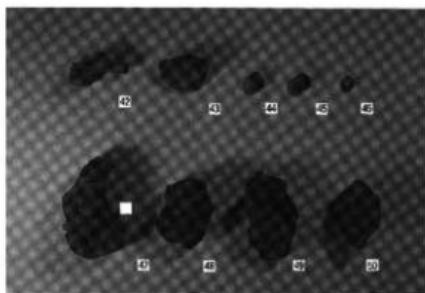
26 - 1



26 - 2



26 - 3



26 - 4



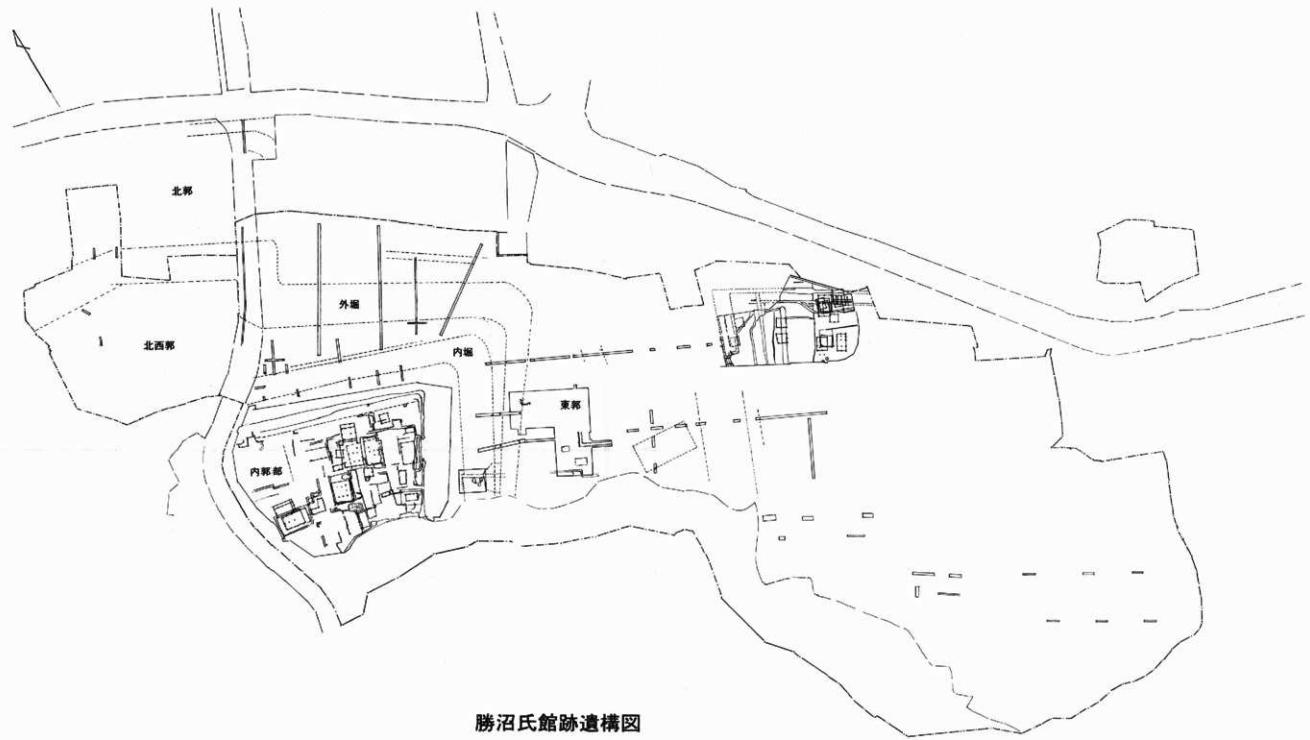
26 - 5

写真26 出土遺物

平成 8 年 3 月 28 日

編集発行 勝沼町教育委員会

印 刷 天野印刷所



勝沼氏館跡遺構図

0 100m

勝沼氏館跡外郭域 G 地区遺構図



